



Title	場所句倒置に関する短評
Author(s)	加藤, 正治
Citation	大阪大学英米研究. 2009, 33, p. 1-10
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/99327
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

場所句倒置に関する短評

(A Squib on Locative Inversion)

加 藤 正 治

1. 序

本稿は次の例のような場所句倒置 (locative inversion) が生じている文の構造について考察するものである。

- (1) a. In the corner sat a wounded soldier. (Lumsden 1988: 65)
- b. Into the room raced an elephant. (*ibid.*)
- c. Away from the car ran three youths. (*ibid.*)

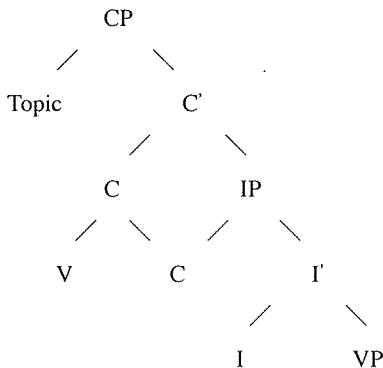
この構文の最も特徴的な点は、主語と主動詞が語順転倒している点である。通常の倒置構文ではほとんどが助動詞と主語の語順転倒であるので、場所句倒置構文は現代の英語としてはどうしても例外的な扱いをせざるを得ない。問題はその例外性をどこに求めるかである。荒唐無稽な規則や構造を設定するよりも、ある程度動機付けを持った規則や構造を設定するほうが望ましいのは当然である。本稿ではそれをKroch & Taylor (1997) で提示された考え方に求めることを検討する。

2. 古英語の動詞第二位現象 (verb-second phenomena)

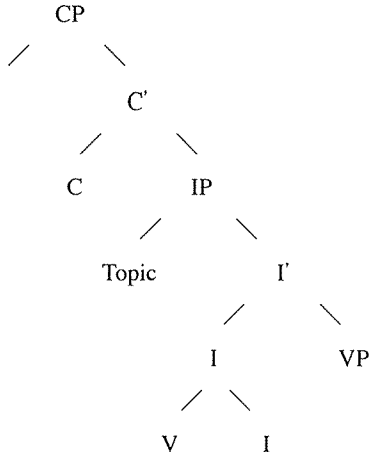
古英語には現代ドイツ語やオランダ語ほど完全ではないが動詞第二位現象

が見られるとされている。動詞第二位現象（以下V2）とは概略、文頭に置かれた話題（topic）の文法機能が何であれ規則的にその次に定形動詞が配置される現象である。基本的にV2には二つのタイプがある。一つは、ドイツ語やオランダ語のように主として主節にV2が生じるタイプ（タイプⅠ）で、もう一つはアイスランド語やイディッシュ語のように、主節も従属節も区別なくV2が生じるタイプ（タイプⅡ）である。生成文法の考え方に従えば、タイプⅠはC P指定部に話題化された構成素が移動しC位置に定形動詞が移動することによってV2が実現されるのでC P－V2言語と呼ばれ、他方タイプⅡは話題化された構成素がI P指定部に移動し定形動詞はI位置に移動するのでI P－V2と呼ばれている。従属節においては原則的にC位置に補文化子（complementizer）が生じているのでそこへの動詞の移動は阻止される。従ってC P－V2言語においてはV2が従属節では実現されず、主節に限定されることになる。I P－V2言語においてはV2に関してC位置を利用しないので、原則的に補文化子の有無にかかわらずV2が実現する。（なお、通常の「主語＋定形動詞＋・・・」も当然V2なのであるが、以下本稿では主語以外の構成素が話題化されたものに話を限定する。）

(2) タイプⅠ（C P－V2）



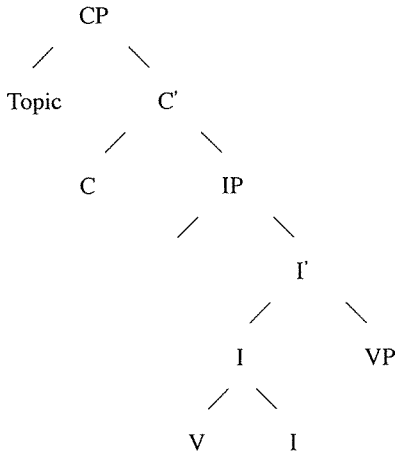
(3) タイプⅡ (I P - V2)



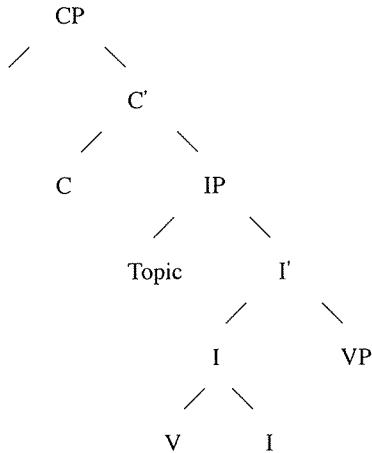
Kroch & Taylor (1997) はPintzuk (1991, 1993) の提案を採用し古英語は I P - V2言語であるとしているが、①従属節に比べて主節のほうがV2の生じる頻度が圧倒的に高いことと②接語 (clitic) としての代名詞の生じる位置についての説明方法に不備があることを踏まえて若干の修正を加えている。Pintzuk (1991, 1993) の提案によれば、主節も従属節もまったく同じV2構造を示すことになるが、Kroch & Taylor (1997) の修正案では主節と従属節はわずかに異なるV2構造を持つと仮定されている。主節では話題化された構成素はI P 指定部を経由してC P 指定部に移動し定形動詞はI 位置に移動する。他方、従属節ではC 位置に補文化子があるために話題化された構成素はI P 指定部に止まり、定形動詞は主節と同じくI 位置に移動する。ところで、この修正案によれば上記②の問題は解決される (詳細は省略する) が、主節と従属節ともにV2構造を作り出すことが可能であることには変わりがないので①の問題はそのまま残ることになる。この点についてKroch & Taylor (1997) はV2の生じる頻度の違いを談話に基づく情報構造の違いに原因があるとしている。即ち、V2は基本的に話題化であり、そもそも従属節内で話

題化を引き起こすような談話構造がほとんど想定できないということが原因であるとしている。

(4) 主節

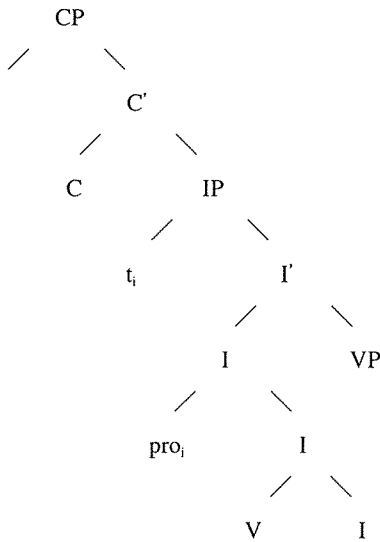


(5) 従属節



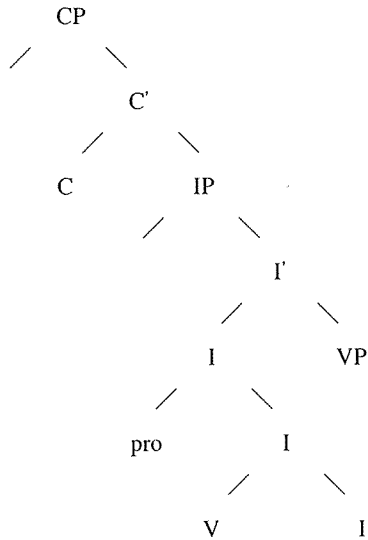
この考え方で一番問題となるのは I P 指定部の扱いである。主節、従属節ともに話題化された構成素がその位置を利用するために、そこを空けておく必要がある。彼らはその点に関して、I P 指定部に存在しない主語と定形動詞との一致を虚辞 (expletive) を介して行なうという前提のもと、次の二つの考え方を示している: ① I P 指定部に空の虚辞 (empty expletive) を配置し、その後それを I に編入する (incorporate) ②空の虚辞を I に直接編入する。なお、現代英語において V2が見られないが、Kroch & Taylor (1997) によれば、それは空の虚辞が用いられなくなったためだとされている。

(6)



(pro : 空の虚辞)

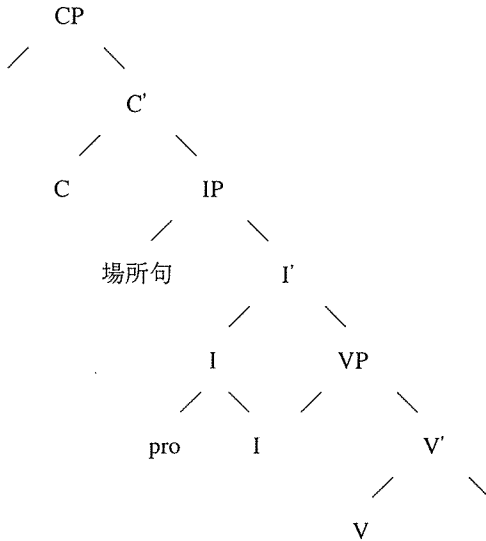
(7)



3. 場所句倒置の構造

本稿では場所句倒置は基本的に上記の(5)の古英語の従属節に見られるV2構造を持つと提案する。古英語においてはIへのV移動が存在したので自動的に場所句と動詞は隣接することになり、必然的に主語と動詞が倒置されることになる。しかし、現代英語ではV移動は行われないのでVP内主語がVP指定部に存在する場合には「場所句－主語－動詞・・・」の語順になり倒置語順にならないことになる。しかし、場所句倒置構文に関してはこの問題は生じないと思われる。この構文に用いられる典型的な動詞は非対格動詞(unaccusative verb)であるとされており、従って主語の基底位置はVP補部の位置であり、またこのタイプの動詞の特性としてVP指定部も存在

(8)



しないからである。(1b、c)に見られるような非対格動詞でない動詞の場合でも場所句とともに用いられることによって非対格動詞の特性を持つとされているのでこの問題は生じない。

文頭に置かれた場所句が繰り上げ (raising) 操作を受けることはよく知られている。

(9) On that hill appeared to be located a cathedral. (Doggett 2004:29)

名詞句以外のものを繰り上げる方法については不明な部分があるが、(8)において場所句は主語位置、即ち、I P 指定部に置かれているので名詞句と同じように繰り上げられる条件は整っていると考えられる。Lumsden (1988) は次のような例を引用して文頭の場所句はC P 指定部にあるとしている。

- (10) I crawled to the room, into which ran a boy.

しかし、この例は場所句がC P 指定部に存在することができる（あるいは、場所句がC P 指定部位置にWH移動される）ということを示しているだけで、Lumsden (1988) が主張するように場所句の基底位置を示している証拠というわけではない。主格の関係詞の場合と同じく、関係詞を含む場所句が最初にI P 指定部に置かれ、その後C P 指定部へ移動したものである、と考えられるので、(8) の構造と矛盾する点は無く問題にならないと思われる。

Kroch & Taylor (1997) のV2の分析に従った(8)は(Kroch & Taylor (1997)と同じく)空の虚辞を用いることになる。そもそも虚辞は使用される環境が限定されており、空の虚辞であってもその点は同じであると考えられる。即ち、(8)を用いて場所句倒置を説明するためには場所句倒置構文が本質的に虚辞の生起する環境を提供していることが前提となる。従来から指摘されている場所句倒置構文と提示のthere構文(presentational *there*-sentence)との平行性は場所句倒置構文が虚辞の用いられる環境であることを示していると考えられるし、またLumsden (1988)においては(1)と並んで次のような例も報告されている。

- (11) a. In the corner there sat a wounded soldier. (Lumsden 1988: 65)
 b. Into the room there raced an elephant. (*ibid.*)
 c. Away from the car there ran three youths. (*ibid.*)

このような平行性を説明する具体的なアイディアは目下のところ持ち合わせていないが、一つの素朴な可能性としてまず次のような基底構造を仮定し、それに適用される統語操作の違いにより派生される構文が異なると考えることができるのではないと思われる。

- (12) [_{IP} [] I [_{VP} V NP_{subj} AdvP_{loc}]] (NP_{subj} : 主語、AdvP_{loc} : 場所句)

主語が I P 指定部位置へ移動すれば通常の「主語－動詞 . . .」の構文が派生される。場所句が I P 指定部へ移動し空の虚辞が I に編入されれば場所句倒置構文が派生される。I P 指定部位置に虚辞thereが代入され V P 内主語が外置されれば提示のthere構文が派生され、さらに場所句が話題化されれば(11)のタイプの構文が派生される。(1b)を例にとってみれば次のような派生になろう。

- (13) [_{IP} [] I [_{VP} [raced] [an elephant] [into the room]]]
- (14) [_{IP} [an elephant]_i I [_{VP} [raced] *t_i* [into the room]]]
- (15) [_{IP} [into the room]_i pro+I [_{VP} [raced] [an elephant] *t_i*]]
- (16) [_{IP} [there] I [_{VP} [_{VP} [raced] *t_i* [into the room]]] [an elephant]_i]]
- (17) [_{CP} [into the room]_j C [_{IP} [there] I [_{VP} [_{VP} [raced] *t_i* *t_j*] [an elephant]_i]]]]

提示のthere構文(16)については、(14)の主語を外置した後空になった主語位置にthereを代入する方法が一般的であるが、主語位置に残っていると考えられる主語の痕跡の扱いが問題になる可能性があるので、V P 内から直接外置する方法をとっている。

4. 結び

本稿では場所句倒置構文を現代英語の例外的な構文と位置付け、この構文の基底構造に虚辞が生起することに基づいてKroch & Taylor (1997)の提案する古英語の従属節のV2構造の分析を適用する可能性を示した。上記の(13)～(17)は一つの可能性を示しただけに過ぎず、論理的主語の定性効果の問題、情報構造に基づく要素の移動と語順の問題、など問題点は多岐に及ぶ。今後の課題にしたい。

<2009年2月1日>

参考文献

- Coopmans, P. 1989. "Where Stylistic and Syntactic Processes Meet: Locative Inversion in English" *Language* 65, 728-751.
- Culicover, P. & R. D. Levine. 2001. "Stylistic Inversion in English: A Reconsideration" *Natural Language and Linguistic Theory* 19, 283-310.
- Doggett, T. B. 2004. *All Things Being Unequal: Locality in Movement*. Ph.D. Dissertation, MIT.
- Kemenade, A. van. 1997. "V2 and Embedded Topicalization in Old and Middle English" *Parameters of Morphosyntactic Change* ed. by A. van Kemenade & N. Vincent, 325-352. Cambridge: Cambridge University Press.
- Kroch, A. & A. Taylor. 1997. "Verb Movement in Old and Middle English: Dialect Variation and Language Contact" *Parameters of Morphosyntactic Change* ed. by A. van Kemenade & N. Vincent, 297-325. Cambridge: Cambridge University Press.
- Lumsden, M. 1988. *Existential Sentences: Their Structure and Meaning*. London: Croom Helm.
- Pintzuk, S. 1991. *Phrase Structures in Competition: Variation and Change in Old English Word Order*. Ph.D. Dissertation, University of Pennsylvania.
- Pintzuk, S. 1993. "Verb Seconding in Old English: Verb Movement to Infl" *The Linguistic Review* 10: 5-35.
- Roberts, I. 1993. *Verbs and Diachronic Syntax: a Comparative History of English and French*. Dordrecht: Kluwer